

# サハリン先住民ウイлтаの文学(1)\*

山田 祥子

## Literature Created by the Uilta from Sakhalin Island (1)

Yoshiko YAMADA

**要旨**：本稿ではサハリンの先住民族ウイлтаの、特にウイлта語による《文学》と、その変化についての初歩的な考察を試みる。ウイлта語に固有の文字はなく、昔話やおとぎ話、歌謡などは従来、口頭で伝承された。このような口承文芸をウイлтаの「伝統文学」と呼ぶ。初めての教科書発行により書き言葉が成立した2008年以降にウイлта語の母語話者が主力(またはその一部)となってウイлта語を書き表した出版物は、2023年12月現在、筆者が確認できただけでも17件ある。そのなかには、話者がウイлта語で創作した作品を含むものや、他言語からウイлта語に翻訳した作品がみられる。このような創作や翻訳作品は、ウイлта語を文字で書いて生み出されている点で、語られる「伝統文学」とは区別される。2008年以降の創作や翻訳作品のなかにウイлтаの「新しい文学」の萌芽を認めるかどうか、多角的かつ長期的な視点での考察を要する。現在ウイлта語を母語とする話者は10名に満たず、この言語は消滅の危機に瀕しているとされる。だが、ただ消滅を待つのでなく、伝統文学を再評価して広く紹介したり、書き言葉を成立させてウイлта語の出版物を次々と出し、若い世代の学習機会を増やしたりして、この言語を後世に伝え残そうとしていることにも注目したい。

**キーワード**：ウイлта ウイлта語 サハリン 先住民 文学

### 1. はじめに

#### 1.1 ウイлтаの概要と言語状況

ウイлта(旧称オロッコ)はサハリン(樺太)島の先住民族である。かつては島の中東部から北東部にかけての地域でトナカイを飼い、季節移動をしながら生活していた。サハリン島内でアイヌやニヴフと居住域を接して交流し、大陸方面でもナーナイ、ウルチャ(ウリチ)、エヴェンキ(エウエンキー)などの諸民族と交流してきたことがわかっている。生業としては狩猟・漁労・採集・交易活動を営み、そのなかで飼育トナカイは移動手段として重要な役割を果たしていた。19世紀半ば以降はロシア(ソ連)や日本の影響を強く受け、ウイлтаの生活様式は大きく変容した。

ウイлтаは統計史上1,000人を超えたことがない少数民族で、2023年12月現在の人口はおおよそ300人前後とみられる(数え方によって差が出る)。人口の多くはサハリン中東部

のポロナイスク（旧、敷香）、および北東部のワールに居住しているが、さまざまな事情でユジノサハリンスク（旧、豊原）やロシア国内の別の地域に拠点を移したウイльтаもいる。

日本で現在ウイльтаを名乗る人は知られていないが、ウイльтаのさまざまな文化的な遺産は国内にもある。それは、日本によるサハリン南部の領有期（1905～1945年）に行われた調査研究、戦後に北海道へ移住したウイльтаを対象に国内で行われた調査研究（1940年代～1990年代）、そして、日本社会に生きたウイльтаの人々により残された、民族資料や言語資料などである。

ウイльтаの固有の言語であるウイльта語は、言語系統論上ツングース諸語に属し、特にナーナイ語やウルチャ語に近いとされている（Ikegami 1974 [池上 2001: 395]）。ウイльта語の方言は、ワールを中心とする地方で話される北方言と、ポロナイスクを中心とする地方で話される南方言の二つに分けられる（池上 1994 [2001: 247-248]）。

ウイльта語に固有の文字はない。今日の日常会話は全般にロシア語で行なわれ、ウイльта語を話すことができるのは70歳代以上の10名未満とみられる。

## 1.2 本稿の目的

筆者は記述言語学を専門として2005年からウイльта語の研究を行っており、主として言語の構造や体系（とりわけ文法）に注意を払ってきた。だが、ウイльта語という言語（ラング）を媒介にして起こるさまざまな活動の総体、すなわち、言語活動（ランガージュ）と、その変化にも見るべきところがある。

ウイльтаの生活様式の変容やウイльта語からロシア語への言語交替にともない、ウイльта語を媒介する言語活動の在り方は変化し続けてきた。上述のとおりウイльтаもウイльта語話者も絶対的に少数なので、小規模コミュニティならではの問題（例えば、個人的な特徴と集団としての特徴の区別の難しさ、話し手と聞き手の両方を観察することの難しさ、など）が絡み、彼らの言語活動を社会科学的に観察するのは困難である。しかし、筆者が言語研究を進めるなかで浮かび上がってくる《文学》らしき要素を抽出して整理することで、言語活動の一部を捉えることならできないのではないだろうか。

とはいえ、筆者はこれまで文学研究を行ったことがなく、もとより《文学》とは何かを積極的に定義する立場にない。そこで筆者なりの初歩として、ウイльтаの《文学》を考えるための視野を決めるといふ、ごく概略的な作業から着手してみたい。この作業が、いずれウイльтаの《文学》を定義する手がかりになるよう期待する。

本稿では、ウイльтаの言語活動における《文学》と、その変化についての初歩的な考察を試みる。口承文芸をウイльтаの「伝統文学」と呼ぶとすれば、書き言葉が成立した2008年以降は、伝統文学とは一線を画す、文字をつかって創作あるいは翻訳された文学作品が発表されている。そのなかにウイльтаの「新しい文学」の萌芽を認めるかどうか、長期的な視点での考察を要することを指摘する。

## 2. 《文学》を考えるための視野

### 2.1 《文学》の定義とエッセンス

まず本節では、ウイルトタの言語活動のなかでどこからどこまでを《文学》と呼ぶか、という根底的な問題について考察する。

日本語の語義に向き合うためにいくつかの国語辞典を調べると、《文学》は次のように定義されている。なお、ここでは、学問としての「文学」（詩学）は考察対象外とする。

- (1) (literature) 言語によって人間の外界および内界を表現する芸術作品。詩歌・小説・物語・戯曲・評論・随筆などから成る。文芸。（新村（編）2018: 2614；四つの語義のうち二つ目）
- (2) （一する）芸術体系の一様式で、言語を媒材にしたもの。詩歌・小説・戯曲・随筆・評論など、作者の、主として想像力によって構築した虚構の世界を通して作者自身の思想・感情などを表現し、人間の感情や情緒に訴える芸術作品。また、それを作り出すこと。文芸。（日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編）2007；「文学」より、七つの語義のうち三つ目）
- (3) 芸術の一様式。体験を鈍化したり、構想力を駆使したりすることによって得られた作中人物の行為や出来事の描写を通じて、「人生いかに生きべきか」という主テーマが読者の想像力と読解力と豊かな感性により自ら感得されることをねらいとするもの。〔普通、小説・詩歌・戯曲を意味し、広義では、随筆・評論を含む〕（山田ほか（編）2017: 1352；四つの語義のうち一つ目）

これらの定義から、「言語による」「芸術」「想像力」「感情や情緒に訴える」などのキーワードを読み取ることができる。概念上、言語活動そのものと重なるが、芸術・想像・感情（情緒）といった要素によって範囲が限定される。

では、文学の作り手である作家は、文学という概念をどのように捉えているだろうか。参考までに、ノーベル文学賞受賞者の大江健三郎（1935-2023）（敬称略。以下、人名について同様）の記述を参照する。大江は文学の目的を(4.1)(4.2)のように記述している。以下、引用中の下線はすべて筆者による。

- (4.1) 言葉によって、ひとりの個としての自分の人間的な根源にいたり、そのように人間であることを総合的、全体的に把握するために、人間は文学をつくり出す。〔中略〕それはまた、その個としての人間が、社会・世界・宇宙の全体的な構造のなかで、暗黒から生れ、暗黒に向かって死んでゆく人間としての自分の根源的な意味を把握する行為である。〔中略〕しかも人間はそのように文学をつくり出す行為の全行程において自由である。個としてのかれは、かれ自身の文学をつくり出そうとして、まったく自由にその言葉、スタイルにはじまるすべてのものを選ぶことができる。（大江 1975: 63-64）
- (4.2) われわれもまた自由の感覚とともに、自発的にそれを受けとめる。むしろわれわれは、その文学の作り手とともに、あらためて自由にその文学をつくり出すのである（ibid.: 65）

大江の記述は作家としての私的な見解を述べるものであり、普遍的な定義とは区別すべきだろう。だが、文学が世界観と密接に関連することや、作者（つくる側）と読者（受けとる側）の双方向性、そして、つくるのも受けとるのも「自由」という特性を持ちうることに気づかされる。

以上(1)~(4.2)を総合して、《文学》のエッセンスを次のように捉えることができる。

- ① 言語による芸術 = 文芸
- ② 双方向性：《作者》の想像力と《読者》の想像力・読解力・感性とを結ぶ
- ③ 《個》から発し、《全体》を把握しようとする行為
- ④ つくる側も受けとる側も自由

より厳密にいうと、①~④は互いに対立する要素ではなく、①が②~④を包摂すると考えられる。したがって、《文学》の最も基本的な要素は①であり、②~④はそれに付随する特徴として絶対ではなく、見方によってあったりなかったりする<sup>1</sup>。

《文学》を考えるための視野を徐々にしぼってゆくため、言語活動のうち①~④のエッセンスの一部または複数を含有するものに《文学》的な性質を認めることにする。明確な線引きは、社会集団や地域により、あるいは個人の見方により、恣意的になされるものとする。

## 2.2 文字を介さない文学：アイヌを参考に

前節で《文学》のエッセンスを取り出してみたが、日本語のように固有の文字を持って久しい言語と、ウイльта語のように固有の文字がない言語とでは事情が異なるのではないか、という疑問が起こる。そこで、ウイльтаの隣人であり、ウイльтаと同様に固有の文字をもたないアイヌの状況を参考に《文学》とは何か、いま一度考えてみたい。

《ウイльта文学》という言葉は一般的でないが、《アイヌ文学》は頻繁に耳にするし、まったく違和感を持たない。この違いには研究の蓄積が関連していると考えられる。きちんと定義されて、さまざまな角度から研究されているからこそ、用語として定着するのだろう。そこで、まず《アイヌ文学》の定義に関する記述を以下に抜粋してみる。

- (5) アイヌ文学は、文字以前の文学であって、ほんとうの意味の文学とはいえないものであるのかもしれない。それほど幼稚で、素朴で、単純である。その上に、物語られる内容は、そのまま事実として信仰され、神聖視されていて未だ完全に宗教から独立してはいないからである。(金田一 1992[1935]: 374)
- (6) もし、従来多くの人々が考えていたように、文学という語を言語と文字とを表現の媒材とする芸術をのみ意味するものとするならば、「アイヌ文学」などという呼称そのものは

<sup>1</sup> ②~④はあくまで大江（1975）の見方に依るものなので、今後はこれら以外の要素も加えて、より多角的に《文学》を捉えてゆく必要がある。

存在し得ないことになるが、文学の領域をさらに広義に解して、文字を媒体とせずとも、言語のまま伝承され来たったもの、あるいは口頭によって、即興的に創作しつつ歌い出る歌謡のごときものをも包括しうるものとすれば、当然、「アイヌ文学」なるものの存在も許されることになる。アイヌ文学は「書かれざる文学」である。(久保寺／佐々木 (編) 2004 [1956]: 45)

(7) アイヌ文学は基本的に「語られる」文学である。それは文字で書かれた文学とはおのずから異なった、口承文芸ゆえのいろいろな表現上の特徴を持っている。[中略] また、口承文芸はひとりの作者の手によって完成され、それがそのまま聞き手の耳に伝えられるというものではない。誰が最初に作ったのかは不明であり、その表現は語り手にゆだねられている。むしろ、口承文芸というのは、語り手によってその度ごとに創造され、その度ごとに完成するものだといってよい。(中川 2020: 194)

(5)(6)(7)から《アイヌ文学》の特質として次のエッセンスを取り出せる。

- a) 文字を介さない、語られる文学
- b) 語り手によって、その度ごとに創造される
- c) 信仰 (宗教) との密接な関連性

b は前節の②④、c は前節の③と関連づけられる。他方、a は前節の①に包含されるが、無文字言語の場合に考慮すべき重要な点といえる。

ところで、《アイヌ文学》を参考にウイルタの文学を考える際、注意すべきことが 2 点ある。このことは中川・志賀・奥田 (1997) にもとづく。

注意すべき 1 点目は、例えば(5)や(6)のような記述に文学の発展史観が潜んでいることである (中川・志賀・奥田 1997: 184, 186-188)。つまり、文学以前の状態から口承文芸 (口頭文芸) へ、ついで文字文芸へと、文学が段階的に発展するというモデルに、アイヌの口承文芸を当てはめようとする態度である (ibid. 187)。だが、文字以前は「幼稚で、素朴で、単純」 (金田一 1992[1935]: 374 ; 上記(5)) で、文字文芸のほうが成熟して複雑であるかどうかは、容易に判断できることではない。文字以前の記録のほうが文字文芸よりも少なく、公正な比較などできないからである。固有の文字を持たない民族の文学の研究に、端から発展史観や進化主義を持ち込むのは不適切だと考えられる。

筆者は次節以降ウイルタの《文学》(とその周辺) を時系列で述べるが、「伝統」から「新しい」ものに発展ないし進化したという風には、少なくとも現段階では捉えない。異なる環境条件で、それぞれに発生し変容してきたものと考えことから始めたい。両者が互いにどのように関連するかは、将来の課題となる。

注意すべき 2 点目は、「和人や欧米などのからの影響を受けながら近代以降のアイヌが産み出しあるいは楽しむようになったさまざまな文学も、アイヌ文学の視野に入れてよい」(中川・志賀・奥田 1997: 185) ということである。固有の言語は民族のアイデンティティと密接

に関連しているが、そのすべてではない。その言語が話せなくてもその民族であるということとは否定されない。これは、ウイльтаについても同様である。したがって、中川・志賀・奥田（1997）の指摘に沿い、ウイльтаがウイльта語以外の言語（日本語やロシア語）で生み出した文学作品も、ウイльтаの文学について考察する際の視野に入れてよいと考える。

いつの日か《ウイльта文学》なる言葉ができるかどうか、筆者にはまだわからない。アイヌ文学のように十分に研究され、さまざまな角度から定義されてゆけば、そのような日が来るかもしれない。その時に、ウイльтаがウイльта語以外の言語で生み出した文学作品が《ウイльта文学》に含まれるかどうか。これも、ウイльтаの言語活動の変化を長期的に観察し、議論をしてから、改めて問われることになるだろう。

### 3. ウイльтаの伝統文学：口承文芸

#### 3.1 口承文芸のジャンル分類

以下、ウイльтаのウイльта語による言語活動に焦点をしぼってゆく。まず、文字を介さずに語り伝えられたもの、すなわち口承文芸について考察する。

ウイльтаの口承文芸を体系的に扱った先行記述に山本（1968）、池上（2002）などがある。前者はもっぱら南方言、後者は南方言を基礎にしつつ北方言も視野に入れている。山本（1968）や池上（2002）の情報をまとめた記述には、山田（2009: 135, 2014: 3）がある。表1では、これらの先行記述に若干の考察を加えて、ウイльта口承文芸のジャンルを概観する。以下、ウイльта語の音韻表記は池上（1997）、ウイльта語のカナ表記は池上（2002: i）に合わせる。

表1： ウイльта口承文芸のジャンル分類（池上 2002 を参考に筆者作表）

| ジャンル名（訳語）                            | 語り／うた   | 聞き手の参画   |
|--------------------------------------|---------|----------|
| テールグ <i>təɔluŋu</i> （昔話）             | 語り（散文的） | -        |
| サフリ <i>saxuri</i> （おとぎ話）             |         | -        |
| ニグマー <i>nigmaa</i> （語りもの）            | 語り＋うた   | あり（合いの手） |
| ハーガ <i>xəəgə</i> （即興歌）               | うた（韻律的） | -        |
| ガヤウ <i>gajau</i> （なぞなぞ）              |         | あり（応答）   |
| その他、童話、童謡（子守唄など）、ハーガ以外の大人向け歌謡（叙情歌など） |         |          |

以下、表1に挙げたジャンルに若干の説明を加える。テールグ *təɔluŋu*（昔話）は、その内容が実際にあったことと信ぜられ、実話と考えられている。例として、アイヌとウイльтаがタライカ地方で争った伝説（タライカの戦い伝説）や、大男や化け物に出会った話などがある。

サフリ *saxuri*（おとぎ話）は、その内容が架空であるつくりばなしと考えられている。キツネやアザラシなどの動物を擬人化した物語は、典型的にサフリに含まれる。

ニグマー *nigmaa*（語りもの）は、語りの部分と節をつけて歌う部分とから成るもので、語りの部分はウイльта語、歌う部分はエヴェンキ（エウエンキー）語に似たことばで演唱され

る。エヴェンキから伝わったジャンルがウイльтаのなかで独自の変容を遂げたものとみられる。内容からみて「英雄物語」「英雄叙事詩」とも呼べる。語り手の演唱だけでなく、聞き手の合いの手を必要とする。ニグマーの記録資料として公開されているものは、筆者の知る範囲では「シーグーニ」を主人公とする一篇（佐藤ほか 2014）に限られる。

ハーガ xəəgə（即興歌）は、その場かぎりで消えずに伝承されてきた歌謡のことを指す。ハーガ特有のリフレインが付く。内容には叙事的なもの、叙情的なものがあり、隠喩など聞き手の想像力をかき立てるような技巧がみられることもある。

ガヤウ gajau（なぞなぞ）は、一定の決まり文句をつけて唱える、なぞ問答である。ガヤウ特有のリフレインを付けてなぞかけし、聞き手に応答が求められる。応答に対する語り手（出題者）の反応も定型的で、総じて伝統的な言葉遊びの一種とみられる。

以上の五つのジャンルを主要なものとして、他に子ども向けの話（童話）や唄（童謡や子守唄）がある。北方言では、未分類の大人向けの歌謡（叙情歌など）も確認されている（池上 2002: i、山田・荒山 2010: 63-64）。

### 3.2 ウイльта口承文芸の文学性

ウイльта口承文芸を 2.1 および 2.2 の考察に照らしてみたい。まず、いずれのジャンルもウイльта語という言語を媒介とした芸術である。この点は 2.1 で抽出した文学のエッセンスのうち①に該当する。

かつ、本来は文字を媒介しなかった点は、2.2 でみたアイヌ文学における口承文芸と共通する。世代を越えてさまざまに語り継がれてきた口承文芸の多様性は、我々の想像を越えるものであっただろう。その全体量に対して、今日触れることができる口承文芸は、研究者らによる記録・資料化作業を経た、ごく一部に過ぎない。

次に、特にニグマー（語りもの）やガヤウ（なぞなぞ）では、聞き手の参画が顕著である。この二つのジャンルは、語り手と聞き手が両方そろってこそ完成する。その他のジャンルについても、聞き手がいてこそその語りだったと想定できる。この点は 2.1 の②「双方向性」と同一ではないが、関連している<sup>2</sup>。

テールグ（昔話）の含む歴史性や教訓、サフリ（おとぎ話）やニグマー（語りもの）で表現される世界観は、ウイльтаの精神世界と結びついている。この点は「《個》から発し《全体》を把握しようとする行為」、すなわち 2.1 の③と関連づけられる。

では、残る一つのエッセンス④「つくる側も受けとる側も自由」は、ウイльтаの口承文芸に当てはまるだろうか。資料が多くはないので判断が難しいが、例えばテールグ（昔話）の一つ、上述のタライカの戦い伝説には類話が多いが、語り手によって少しずつ内容が異なる。

<sup>2</sup> 書かれる文学において作品が書かれる（生み出される）場と読まれる場が別々なことの方が多いのに対し、語られる文学においては語られる場と聞かれる場は基本的に同一である。このような「場」の違いがあるのでわかりにくいですが、書かれる文学が《作者》と《読者》の双方向性を含有しているとすれば、《読者》あってこそその文学といえる。これを《読者》の「参画」とまで言うと強引だが、《作者》と《読者》の双方向性ということと、ウイльтаのニグマーやガヤウにおける聞き手の参画ということとはパラレルの関係になっていると考える。

ニグマー（語りもの）として資料化されたシーグーニ物語は、同じ語り手から複数回録音されているが、その都度少しずつ内容が異なる。ハーガ（即興歌）に含まれる隠喩表現は、解釈や楽しみ方を聞き手に委ねているようである。これらの点は④と関連して、ウイльта口承文芸の文学性を示唆する特徴であるように思われる。

以上の考察は概観に過ぎないが、総じてウイльта口承文芸の文学性を認めることができる。歌謡やなぞなぞのようなジャンルは、場合によって《文学》ではなく、例えば音楽や言葉遊びなどに分類する方が良いかもしれないが、《文学》を考える視野には入れておきたい。

「すぐれた著述や作品で、過去の長い年月にわたって多くの人々の模範となり、また愛好されてきたもの」（日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編）2007；「古典」より、三つの語義のうち三つ目）を「古典」という。ウイльта口承文芸は、記録こそ多くはないものの、世代を越えて受け継がれてきた、ウイльтаにとっての「古典」に近いかもしれない。だが、日本語の「古典」という語には書物というイメージが付きまとうので、口承文芸を「古典」と呼ぶことに若干の違和感がある。そこで、「古典」より緩やかな意味合いで、ウイльтаの口承文芸をウイльтаにとっての「伝統文学」と呼んでおく。

#### 4. ウイльта語を書く：書き言葉の成立・保存活動・出版物

##### 4.1 書き言葉の成立（2008年4月）

固有の文字を持たない言語は世界中に多々あるが、多くの場合、他言語の文字を借りて一定の書記法を定めることで書き言葉が成立する。例えばアイヌ語もこれまでさまざまな文字で書き表されてきたが、近年は日本語のカナを用いた表記の普及が進んでいる。専門家の間ではローマ字による音韻表記も用いられるが、カナ表記のほうが一般の日本語話者にはなじみやすい。

アイヌ語やニヴフ語などの周辺言語と比べて随分遅く、ウイльта語の書き言葉の成立は2008年4月である。池上二良（北海道大学名誉教授；1920-2011）が1992年にサハリン州政府に提出した草案（Икегами 1994 [2001: 145-153]）をもとに改訂が加えられ、ロシア文字（キリル文字）を基礎とするウイльта語書記法が決まった。その後、池上がサハリンに赴いてウイльта語の母語話者たちを指導し、ウイльта語で初めての教科書（文字教本）<sup>3</sup>の作成に当たった。内容は2001年頃にほぼ完成していたというが、出版資金の調達などに年月がかかり、2008年4月ようやく教科書『ウイльта語で話しましょう』（Икегами и др. 2008）として刊行された（図1）。この教科書刊行をもって初めて、誰もが一定の書記法でウイльта語を書き表すことができるようになったのである。教科書刊行までの経緯や教科書の内容については、津曲（2009: 2-3）、笹倉（2009）、山田（2010: 105-107; 2013: 15-18）が詳しい。

<sup>3</sup> 教科書のなかでも、ロシア語で *букварь* と呼ばれ、主としてアルファベットと綴り方の学習を目的として初等教科書。英語でいうところの *ABC book* または *primer*。「文字教本」と訳す方がより正確だが、本稿では、日本語で一般的な「教科書」という語を用いることにする。





図1：教科書『ウイльта語で話しましょう』（イケガミ и др. 2008）の表紙（左）と見返し（右）。見返しでウイльта語を書くためのアルファベットの一覧が示されている。ロシア文字を基礎としつつ、ロシア語では常用しない特殊文字や補助記号もいくつか加えられている。

ロシアで暮らすウイльтаはロシア語を日常言語としているので、ロシア文字でウイльта語を書き表せることのメリットはとても大きい。このことはアイヌ語カナ表記のメリットと似ている。しかし、2008年時点でウイльта語を理解できる人（話者）はわずか十数名だった<sup>4</sup>。いくら書いても理解者がいなくなれば意味がない。そこから、ウイльта語を次世代に残し伝えるための、話者たちの懸命な試行錯誤が始まった。

#### 4.2 ウイльта語の保存を推進する話者たちとその支援

2008年以降、ウイльта語の保存は話者たちを中心に推進されている。だが、こうした危機言語の保存が、話者たちだけでできるはずはない。本節では、近年のウイльта語の保存を支える働きについて、筆者の見解を述べておきたい。

第一に、サハリンの石油・天然ガス開発プロジェクトによる先住民支援がある。すなわち、サハリンIの主要な出資者だった米国石油大手のエクソンモービル<sup>5</sup>による先住民支援プロジェクト、そして、サハリンIIのオペレーター会社であるサハリンエナジーとサハリン州政府およびサハリン北方先住少数民族代表者会議が産官連携・三者共同で主催する「サハリン北方先住少数民族協力発展計画」（以下、「協力計画」と略す）<sup>6</sup>である。これらは、消滅の危機に瀕した先住民言語の出版活動に限らず、伝統的な生業（トナカイ飼育業など）の継続、先

<sup>4</sup> その後、10名未満まで減少して今日に至る。この数年、新型コロナウイルス感染症で亡くなった話者もいる。筆者が知り合った話者で現在（2023年12月）も存命の方は計6名である。

<sup>5</sup> ロシアによるウクライナ侵攻開始の後、エクソンモービルは2022年10月にサハリンIプロジェクトから撤退した。

<sup>6</sup> ロシア語の正式名称は План содействия развитию коренных малочисленных народов севера Сахалинской области（直訳：サハリン州北方先住少数民族協力発展計画）、英語の正式名称は Sakhalin Indigenous Minorities Development Plan (=SIMDP)（直訳：サハリン先住少数民族発展計画）という。

住民芸術の振興、生活全般の支援などにも及んで大々的に行われ、地域社会における先住民の文化振興や、国際社会に向けた先住民文化の発信を進めてきた。エクソンモービルや「協力計画」は出版物のプレゼンテーションイベントや各種フェスティバルを華やかに催し、街頭広告なども徹底するので、そのつど世間一般の関心も高まる。

関連して、各地の博物館や図書館などは伝承者たちの活動を現場で手助けしてきた。筆者のよく知るところでは、サハリン州郷土博物館、A. P. チューホフ「サハリン島」記念文学館、ノグリキ町郷土博物館、ノグリキ地方中央図書館などである。これらの施設では、先住民関連の展示や催しをするだけでなく、出版物の編集等も行っている。

調査者・研究者の来訪も重要である。2008～2015年にかけて筆者がウイльта語の現地調査に通うなかで、さまざまな調査者・研究者に出会った。はるばるロシア中央部や国外から何らかの専門家が調査にやって来ると、話者たちは自分たちの言語の重要性をますます認識していた。日本からの来訪者をも話者たちはあたたかく迎え入れる。筆者が調査成果物を持参すると、話者たちは目を細めて大切に収めてくれる。それが日本語で書かれていて読解できないとしても、話者たちはそれを見て、日本で自分たちの言語のことが紹介されている、日本でも関心を持たれていると認識するのである。

そして、高齢の話者たちの最も重要な支えは家族（特に、子の世代）である。筆者の知るかぎり、ウイльта語の保存を推進する話者には、多くの場合、家族の深い理解と援助がある。彼らは上述の企業や博物館・図書館、調査者たちとの連絡窓口を担うこともあれば、遠方からの来訪者の送迎や宿泊の世話をすることもある。話者たちの《仕事》を補助あるいは管理する秘書かマネージャーのような存在である。精神面でも、日頃から話者たちに寄り添って、背中を押し続ける。

以上のような支援の輪のなかで、2008年以降、ウイльта語を残したいという話者たちの熱意が実を結んできた。出版物はそのなかでも最も明瞭に、次世代へ向けて残される形態といえる。

### 4.3 2008～2012年の動き：保存活動と国連宣言

初めてのウイльта語教科書（Икегами и др. 2008）が刊行された2008年4月に前後して、一部の話者たちのあいだで教案づくりが進められていた。その話者たちとはウイльта語教科書の編集者であり、池上二良の学術的な指導を受けたE. A. ビビコワ、I. Ja. フェジャエワ、S. ミナト、L. R. キタジマの4名である。彼らは、ウイльта語を母語として習得した最後の世代といえる。4名のうち、例えばビビコワはスケルトンゲームのような文字遊びや、子ども向けの詩歌のアイディアを書きためていた。2010年には当時居住していた町、ノグリキの郷土博物館の一室を借りてウイльта語教室を開始し、自作の文字遊びや詩歌を実際に運用した<sup>7</sup>。この段階では、2008年の教科書（Икегами и др. 2008）を除き、ウイльта語で書かれた

<sup>7</sup> ノグリキのウイльта語教室について、詳しくは山田（2011）を参照されたい。2010年度にビビコワ宅にホームステイしていた筆者も、微力ながら教室の運営を手伝った。

ものを発行する動きは特に見られなかった。

2008年の次に大きな出来事は、2012年にユジノサハリンスクで「先住民族の権利に関する国際連合宣言」（以下、国連宣言）のウイльта語訳を公表したことだった。その内容は、教科書（Икегами и др. 2008）で定められた書記法によりウイльта語で著され活字化されて、小冊子（Бибикова & Федяева (перевод). 2012）として発表・配布された。このことは、国連宣言をウイльта固有の言葉で表明し、ウイльтаという民族の存在と権利を国際的に宣言しただけでなく、ウイльта語による表現や言語活動にも重大な影響を及ぼした。

国連宣言には「先住」「民族」「人権」など、従来のウイльта語に明確な対応語がなかった概念が多く含まれている。国連宣言のウイльта語訳を任された E. A. ビビコワと I. Ja. フェジャエワは、そのために相当頭を悩ましたという。必要に応じてロシア語の音訳という手段も使ったが、特に上記の3語のように重要な概念はできるだけ自分たちの言葉で表わしたかった。そこで、ウイльта語の既存の語彙のなかから近い語を辞書や文献から探し出して当てる、ロシア語の単語の意味分析をしてウイльта語でも同様の派生語をつくるなどして、どうにかこうにかウイльта語に置き換えることに成功した。

ビビコワ、フェジャエワの両名はこの経験を経て、従来ウイльтаになかった概念でもウイльта語で表現できること、すなわち、ウイльта語の生産性に気づき、翻訳に自信を持った。特にビビコワは、自ら文献を読んで学術的な知識を身に付け、筆者ら研究者からの依頼を受けて古いウイльта語資料の聴取や分析もして語彙を増やし、どんどん翻訳スキルを高めていった。

#### 4.4 ウイльта語が書かれた出版物

以下、2023年12月現在、筆者が確認できた範囲で、2008年以降にウイльта語が書かれた出版物をリスト化する。ウイльта語話者が主力となって、あるいは、主力に加わって、作成されたものに限定する。出版年の時系列で、筆頭編著者名<sup>8</sup>（出版年）『書名』[使用言語]の日本語表記・日本語訳を挙げる。書誌情報の詳細は文献リストに掲載する。

- [1] E. A. ビビコワ・E. V. スヴェルクノワ（2012）『ウイльта語教授法：指導計画と方法論大要』[ロシア語・ウイльта語]（Бибикова, Сверкунова 2012）
- [2] ナプカ（佐藤チヨ）ほか（2013）『ネズミの母親とカエルの母親：ウイльтаのおはなし』[ウイльта語・ロシア語]（Напка (Чиё Сато) и др. 2013）
- [3] N. A. マンチェワ・E. A. ビビコワ（2013）『タイガのうた：ウイльтаの歌謡と物語のフォークロア』[ロシア語・ウイльта語]（Мамчева, Бибикова 2013）
- [4] T. I. ペトローワほか（2014）『ウイльта民族のおはなし』[ロシア語・ウイльта語]（Петрова и др. 2014）

<sup>8</sup> 2名の共編著ならば2名の氏名を併記し、編著者が3名以上の場合は筆頭の1名のみを挙げて「ほか」を付ける。本稿末尾の文献リストでは省略しない。

- [5] E. A. ビビコワ (2014) 『君の近くに』 [ウイльта語・ロシア語] (Биби́кова 2014a)
- [6] E. A. ビビコワ (2014) 『小道にそって』 [ウイльта語・ロシア語] (Биби́кова 2014b)
- [7] 佐藤チヨほか (2014) 『ウイльта長編英雄物語ニグマー：シーグーニ物語テキスト』 [ウイльта語・日本語・ロシア語] (佐藤ほか 2014)
- [8] サン・テグジュペリほか (2016) 『星の王子さま (ウイльта語訳)』 [ウイльта語・ロシア語] (サン・テグジュペリほか 2016)
- [9] ノグリキ地方中央図書館ほか (2017) 『小鳥さん：ウイльтаの遊び』 [ウイльта語・ロシア語・英語] (МБУК НРЦБ и др. 2017)
- [10] A. P. チェーホフ/E. A. ビビコワ (2018) 『サハリン島 (旅行記より)：第 11 章』 [ロシア語・ウイльта語] (Чехов/ Биби́кова 2018)
- [11] I. V. クラシルニコワほか (2018) 『勇敢なメルゲ：ウイльтаの昔話』 [ロシア語・ウイльта語・英語] (Красильникова и др. 2018)
- [12] O. N. セミョーノワほか (2019) 『石になった女』 [ウイльта語・ロシア語] (Красильникова и др. 2019)
- [13] A. S. ムヴチク (2019) 『魂の啓示：詩集』 [ロシア語・ウイльта語] (Мувчик 2019)
- [14] E. A. ビビコワ (2020) 『ロシア語・ウイльта語会話帳』 [ロシア語・ウイльта語] (Биби́кова 2020)
- [15] E. A. ビビコワほか (2020) 『ウイльта民族の昔話』 [ロシア語・ウイльта語・英語・日本語] (Биби́кова и др. 2020)
- [16] A. アラファノワ (編著) (2021) 『ものがたりのサハリン』 [ロシア語・ニヴフ語・ウイльта語] (Арафанова (авт. ред.) 2021)
- [17] N. V. サンギ・E. A. ビビコワ (2023) 『うさぎのいえ』 [ニヴフ語・ウイльта語・ロシア語] (Санги, Биби́кова 2023)

以上[1]～[17]に書かれたウイльта語は、すべて教科書 (Икегами и др. 2008) の書記法による。このうち、[1]は教科書 (ibid.) の教師用チュートリアルのようなものである。

[2][3][4][7][9][11][12][15][16]は、過去に採録された口承文芸のデータを文字化・訳付したもの、または、すでに研究資料として資料化されていた口承文芸を翻刻したり、一般が読みやすいようにデザインし直したりしたもの、などである。伝統文学を再評価し、広く紹介する取り組みといえよう。なお、[3]は歌謡の集成として、新しく創作された歌謡も一部に含まれている。

[5][6]は E. A. ビビコワの創作による子ども向けの詩歌が集成されている。これは上述のとおり、ビビコワが以前から書きためていたもので、ノグリキのウイльта語教室でも使用されていた。これに対し[14]の会話帳は大人向け教材の一種といえよう。[14]では「おはよう」「こんにちは」から始まる基本会話例文がロシア語とウイльта語の対訳形式で紹介されている。

[8][10][17]では、フランスの作家サン・テグジュペリの「星の王子さま」、ロシアの作家・劇作家 A. P. チェーホフの「サハリン島」、ロシア民話「うさぎのいえ」といった著名な作品

や民話をウイльта語に翻訳したものが紹介されている。

[13]は、ウイльтаの A. S. ムヴチク<sup>9</sup>がロシア語で創作した詩を紹介する本で、一部にウイльта語が対訳で付されている。ウイльта語訳は E. A. ビビコワによる。

このほか、2022 年 12 月にウイльта語教科書の新版が刊行されたという（ビビコワ p.c./ АКМНСС и ДВ РФ 2022）<sup>10</sup>。だが、筆者が現物を（紙媒体でも電子媒体でも）まだ確認していないので、教科書の新版を上のリストに加えることができない。おそらく筆者が確認できていない出版物は他にもあるだろう。リストの補充・更新は今後の課題となる。

確認できた範囲でも、2008 年以降、ウイльта語が書かれた出版物が少なくとも 17 件あるとわかった。これは書き言葉が成立する以前にはありえなかった、ウイльтаの歴史上、実に画期的なことである。

## 5. 考察

2 節で文学一般について、3 節でウイльтаの伝統文学について確認したが、4 節でみた 2008 年以降のウイльта語の状況からどんなことを見出せるだろうか。

第一に、2008 年に教科書（Икегами и др. 2008）が定めた書記法により、ウイльта語が書き表された印刷物が出版されているという事実である。書き言葉が成立しただけでなく、実際に運用され、出版物という次世代に残るかたちに結実していることが確かめられる。

第二に、2008 年以降の出版物を概観すると、過去に採録された口承文芸を一定の書記法に改めて紹介するものが約半数を占める。これは口承文芸の文字化や翻刻により、ウイльтаの伝統文学を再評価する動きといえる。

第三に、2008 年以降の出版物のなかには、創作や翻訳によりウイльта語で新たに生み出された作品もみられる。これらは、口承文芸ないし伝統文学のジャンルには収まらない。そして、語るのではなく、文字で書いて生み出されている。ウイльта語の書き言葉による創作や翻訳は、伝統の範囲から一步を踏み出した、新しいスタイルの言語活動といえる。

その始まりはどの時点だろうか。4.3～4.4 でみたように、教科書（Икегами и др. 2008）の次に出版物が出始めたのは 2012 年で、国連宣言ウイльта語訳の発表の頃である。ただ、2008～2012 年の間にも言語の保存活動（ウイльта語教室など）が草の根的に進められ、そのなかで新しくウイльта語で表現する作品が生み出されていたのを筆者は参与観察で目の当たりにした。書き言葉が前提となっていることも重視して、2008 年 4 月の教科書（Икегами и др. 2008）刊行にウイльтаの言語活動の転換点を見定めたい。

2008 年以降のウイльта語による創作や翻訳を、言語活動のなかでも《文学》と呼ぶとすれば、気にかかる点が二つある。一つ目は、他言語からの翻訳作品をウイльтаの文学と呼んで

<sup>9</sup> ニヴフ男性に嫁いでニヴフの家庭で暮らしているのがニヴフの姓を有するが、本人はウイльтаのアイデンティティを持つ。

<sup>10</sup> Институт этнологии и антропологии РАН (2022)が報告する書誌情報は以下のとおり：E.A. Бибикова, С. Минаго, Л.И. Миссонова, А.М. Певнов. *Букварь: учебное пособие на уильтинском языке для общеобразовательных организаций*. М.; СПб.: Просвещение, 2022. (серия “Новый учебник Дальнего Востока”). ISBN 978-5-09-102226-1.

いいのか、という問題である。ウイльта語による《翻訳文学》というほうが、より正確かもしれない。まずは《文学》というテーマの下で扱い、個々の作品にどこまでウイльтаの世界観が表われているか、別稿で改めて考察したい。

気がかりの二つ目は、ウイльта語による創作や翻訳をできる人物が、現在のところ E. A. ビビコワに限られていることである。もし一個人の言語表現に民族名を付して《ウイльта文学》とも呼べば、反論があるかもしれない。ウイльта語を母語とする話者はビビコワを含めて 10 名に満たず、全員 70 歳代を超えているので、母語話者のなかから新たに《文学》の作者が輩出されることはあまり考えにくい。考えられるとすれば、学習者のなかからウイльта語で創作する人物が現れる可能性である。

ウイльта語の学習は、上述のウイльта語教室のほか、ポロナイスクの小学校でも郷土学習の授業の一環として行われてきた。2018 年には教科書（Икегами и др. 2008）の内容に読み上げ音声をつけたオーディオ教科書（аудиобукварь）も電子版で発行され、発音も合わせて自学自習もできるようになった。2022 年末に発行された新版教科書も、ポロナイスクの小学校で運用されるという（АКМНСС и ДВ РФ 2022）。

また、A. P. チェーホフ「サハリン島」記念文学館（ユジノサハリンスク）が毎年開催している「郷里のことば」シンポジウムでは、子どもから大人までの学習者が先住民言語（ニヴフ語、ウイльта語など）でスピーチを行う。審査員は母語話者が務めるという。これは学習成果を発表する場を提供し、母語話者と学習者が交流する機会ともなり、学習のモチベーションを高める、極めて重要な取り組みであると考えている。

サハリンでこのまま先住民文化の保存・復興の気運が高まればウイльта語の学習者が増えるかもしれない。このことはウイльтаの言語史において目新しい、重大な傾向である。だが、自ら文学作品を生み出す創造的な《話者》の誕生を将来に望めるかどうかはわからない。その意味で、ウイльта語で文学作品を生み出させるウイльтаは、もしかしたらビビコワで最後になるかもしれない。

他方で、前節の[13]に挙げた Мувчик (2019)により、ウイльтаがロシア語で生み出した詩が世に出ていることにも着目したい。同書には、ビビコワがウイльта語訳を付しているが、仮にウイльта語訳がなかったとしても、ウイльтаによる文学作品である。上述の繰り返しになるが、ウイльтаがウイльта語以外の言語で生み出した文学作品も、ウイльтаの文学を考察する際の視野に入れていきたい。

## 6. 結論

以上、本稿では、サハリンの先住民族ウイльтаの《文学》について初期的な考察を行った。初めての教科書（Икегами и др. 2008）の発行により書き言葉が成立した 2008 年を転換点とし、それ以前に口承で語り伝えられてきた文芸をウイльтаの「伝統文学」と呼んだ。2008 年以降にウイльта語話者が主力（またはその一部）となってウイльта語を書き表した出版物は、筆者が確認できただけでも 17 件ある。そのなかには、話者がウイльта語で創作した文学作品を含むものや、他言語からウイльта語に翻訳された文学作品がみられる。このような創作や

翻訳作品は、ウイльта語を文字で書いて生み出されている。このことは、語られる「伝統文学」とは、少なくともその方法において区別される。2008年以降のウイльта語の言語活動に「新しい文学」の萌芽が認められるかどうか、今後の長期的な考察を要する。

母語話者の減少により、ウイльта語が消滅の危機に瀕していることは間違いない。だが、ただ消滅を待つのではなく、伝統文学を再評価して広く紹介したり、書き言葉を成立させてウイльта語の出版物を次々と出したり、新たに創作や翻訳による作品を生み出し、若い世代の学習機会を増やしたりしていることにも注目したい。

本稿は、ウイльтаの言語活動を《文学》というテーマで記述する（筆者としては）初めての試みとして、極めて概略的な考察で終えることにする。次回は、個々の作品を取り上げ、そのなかの文学性について考察してみたい。

### 謝辞

\* 本研究はJSPS 科研費 JP23K18668（2023-2024年度）の助成を受けている。また、2009-2014年度にかけて以下の助成を受けて実施した現地調査の成果も含む：（年度順に）JSPS 科研費 JP09J02110（2009-2010年度）、JSPS 優秀若手研究者海外派遣事業（2010年度）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所特別経費「急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携体制の構築」による研究未開発言語調査派遣（2011年度）、岡田宏明基金（2012年度）、JSPS 科研費 JP223020075（代表：津曲敏郎、2010-2014年度〔調査実施は2013, 2014年度〕）。本稿は、北海道言語研究会第24回研究例会（2023年3月24日、室蘭工業大学）における口頭発表の内容を文章化し、大幅に増補・改訂して作成した。研究例会で貴重なご意見をくださった先生方に感謝申し上げます。匿名の査読者2名からも丁寧なご確認とご助言を賜ったことを申し添える。

### 参考文献

- 池上二良 1994 「ウイльта語の南方言と北方言の相違点」『北海道立北方民族博物館研究紀要』3: 9-38 [池上 2001: 247-283 所収].
- 池上二良 1997 『ウイльта語辞典』札幌：北海道大学図書刊行会.
- 池上二良 2001 『ツングース語研究』東京：汲古書院.
- 池上二良（採録・訳注）2002 『増訂ウイльта口頭文芸原文集』（ツングース言語文化論集16）文部省特定領域研究(A)環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 A2-013, 大阪学院大学.
- 大江健三郎 1975 「なぜ人間は文学をつくり出すか」野間宏ほか『岩波講座 文学1：文学表現とはどのような行為か』pp. 38-69、岩波書店.
- 金田一京助 1992 「アイヌ語とアイヌ文学」金田一京助全集編集委員会（編）『金田一京助全集 第7巻 アイヌ文学 I』pp. 368-380、三省堂 [初出：1935 『改造社日本文学講座 第15巻 特殊研究篇』改造社].
- 久保寺逸彦／佐々木利和（編）2004 『アイヌ民族の文学と生活』（久保寺逸彦著作集2）草風館 [初出：1956 『東京学芸大学研究報告第7集（別冊）』].
- 笹倉いる美 2009 「【書評・紹介】池上二良ほか編『ウイльта語を話しましょう』」『北海道民族学』5: 30-33.
- 佐藤チヨ（演唱）／池上二良（採録・解説）／山田祥子（編訳）／E. ビビコワ（露訳）／津曲敏郎（監修）

- 2014『ウイльта長編英雄物語ニグマー：シーグーニ物語テキスト』（ツングース言語文化論集 58）札幌：北海道大学大学院文学研究科.
- サン・テグジュペリ（著）／ノーラ・ガリ（ロシア語訳）／エレナ・A・ビビコワ（ウイльта語訳）／山田祥子（編集）／津曲敏郎（監修）2016『星の王子さま：ウイльта語・ロシア語対訳版』（ツングース言語文化論集 61）札幌：北海道大学大学院文学研究科.
- 新村出（編）2018『広辞苑』（第7版）東京：岩波書店.
- 津曲敏郎 2009「サハリンの言語世界：単語借用から見る」津曲敏郎（編）『サハリンの言語世界：北大文学研究科公開シンポジウム報告書』pp.1-10, 札幌：北海道大学大学院文学研究科.
- 中川裕 2020『改訂版 アイヌの物語世界』（平凡社ライブラリー899）平凡社.
- 中川裕・志賀雪湖・奥田統己 1997「アイヌ文学」高木史人ほか『口承文学2・アイヌ文学』（岩波講座 日本文学史 17）pp.181-263, 岩波書店.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編）2007『日本国語大辞典』（第2版）（ジャパンレッジ Lib）東京：ネットアドバンス.
- 山田忠雄ほか（編）2017『新明解国語辞典』（第7版特装青版）東京：三省堂.
- 山田祥子 2009「ウイльтаの語り物ニグマーについての予備的考察」『昔話：研究と資料』37: 133-143.
- 山田祥子 2010「【講演会等報告】講演会・コンサート『講演と唄の夕べ：サハリン先住民言語を伝え、残す』」『北海道民族学』6: 102-109.
- 山田祥子 2011「【現地報告】ウイльта語教室：『シレイ・セーックレ』（ロシア・サハリン州ノグリキ町）」『北海道民族学』7: 73-76.
- 山田祥子 2013「ウイльта語北方言の文法と言語接触に関する研究」北海道大学院文学研究科博士学位申請論文.
- 山田祥子 2014「まえがき」佐藤チヨ（演唱）／池上二良（採録・解説）／山田祥子（編訳）／E. ビビコワ（露訳）／津曲敏郎（監修）『ウイльта長編英雄物語ニグマー：シーグーニ物語テキスト』（ツングース言語文化論集 58），pp. 3-8, 札幌：北海道大学大学院文学研究科.
- 山田祥子・荒山千恵 2010「ウイльтаの歌謡：言語と音楽の記録4例」『北海道民族学』6: 62-74.
- 山本祐弘 1968『北方自然民族民話集成』東京：相模書房.
- АКМНСС и ДВ РФ [=Ассоциация коренных малочисленных народов Севера, Сибири и Дальнего Востока] 2022. В конце 2022 года на Сахалин поступит букварь по основам правописания на языке уйльта.  
<https://raipon.info/press-tsentr/novosti/v-kontse-2022-goda-na-sakhalin-postupit-bukvar-po-osnovam-pravopisaniya-na-yazyke-uyлта/>（最終閲覧日：2024年1月2日）
- Арафанова, А. (автор, редактор) 2021. *Сказочный Сахалин*. Москва: Издательство PessPass.
- Бибикова, Е. А. 2014а. *Лакэ ситтэи олинэ (Близким тебе станет)*. Южно-Сахалинск: Издательство «Сахалин-Приамурские ведомости».
- Бибикова, Е. А. 2014б. *Дбримакки: По тропинке*. Южно-Сахалинск: Издательство «Сахалин-Приамурские ведомости».
- Бибикова, Е. А. 2020. *Русско-уйльтинский разговорник*. Южно-Сахалинск: Издательство «Сахалин-Приамурские ведомости».



<https://www.calameo.com/read/006606290778b8421bccd> (最終閲覧日 : 2023 年 12 月 20 日)

Бибикова, Е. А., И. Я. Федяева (перевод). 2012. *Всеобщая декларация прав человека на уйльтинском языке*. Южно-Сахалинск.

Бибикова, Е. А., Е. В. Сверкунова. 2012. *Преподавание уйльтинского языка: Программно-методический сборник*. Издательство ИРОСО: Южно-Сахалинск.

Бибикова, Е., Т. Дериведмидь, Ю. Завьялова, Л. Жамьянова, М. Семитко 2020. *Легенды народа Уильта*. Красноярск: Сахалин Энерджи Инвестмент Компании Лтд.

Ikegami, J. 1974 “Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen”. *Sprache, Geschichte und Kultur der Altaischen Völker; Protokollband der XII. Tagung der Permanent International Altaistic Conference 1969 in Berlin*. pp.271-272. Berlin: Akademie-Verlag [池上 2001: 395-396 所収].

Икегами, Дж. 1994 Проект письменности уйльтинского языка. *Acta Slavica Iaponica*, Tomus XII: 253-258. Sapporo: The Slavic Research Center, Hokkaido University.

Икегами, Дж., Е. А. Бибикова, Л. Р. Китазима, С. Минато, Т. П. Роон, и И. Я. Федяева. 2008 *Уилтадаурису: Говорим по-уйльтински*. Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство.

Институт этнологии и антропологии РАН 2022. Новости: При участии ИЭА РАН подготовлен букварь на уйльтинском языке.

<https://iea-ras.ru/?p=9741> (最終閲覧日 : 2024 年 1 月 2 日)

Красильникова, И. В., О. Е. Рожнова (сост.)/ О. Н. Семёнова (сказительница)/ И. В. Недялков (записал)/ Е. А. Бибикова (перевод на уйльтинскую графику с латинской)/ Е. А. Бибикова, И. Я. Федяева (перевод на русский язык)/ К. А. Красильникова (перевод на английский язык)/ В. В. Осипова, В. Н. Осипова (художники) 2018. *Храбрый Мэргэ: Манга Мэргэ: Brave Megre: Уйльтинская легенда*. Южно-Сахалинск: Издательство «Сахалин – Приамурские ведомости».

<https://www.calameo.com/read/005108258490b32730531> (最終閲覧日 : 2023 年 12 月 20 日)

Красильникова, И. В., О. Е. Рожнова (сост.)/ Е. А. Бибикова/ В. Осипова, М. Носырева и др. 2019. *Каменная женщина - Золомо Эктэ: уйльтинская легенда*. Ноглики: МБУК Ногликская Централизованная Библиотечная система.

<https://www.calameo.com/read/0051082589b64b334c7eb> (最終閲覧日 : 2023 年 12 月 20 日)

Мамчева Н. А., Е. А. Бибикова 2013 *Таёжные песни «Пурэ jāјани»: Сборник песенно-повествовательного фольклора уильта*. Южно-Сахалинск: ГБУК «Сахалинский областной центр народного творчества».

МБУК НРЦБ [=Муниципальное бюджетное учреждение культуры Ногликская районная центральная библиотека] / И. В. Красильникова, О. Е. Рожнова (сост.) / Чиё Сато (Напка) (сказительница)/ Бибикова, Е. А. (перевод на русский)/ Е. А. Генрихс, Я. О. Алёшин (перевод на английский)/ А. С. Мутусик (художник). 2017. *Горочиннэ пуртэ купбчихэниндэ: Птичка-синичка, уйльтинская игра-потешка*. Южно-Сахалинск: Издательство «Сахалин-Приамурские ведомости».

Мувчик, А./ И. В. Красильникова, О. Е. Рожнова (сост.)/ Е. А. Бибикова/ Е. А. Владимиров, В. Н. Соловьёв 2019. *Откровение души: Сборник стихотворений*. Южно-Сахалинск: Издательство «Сахалин - Приамурские ведомости».

<https://www.calameo.com/read/005108258117f79d3ee2f> (最終閲覧日 : 2023 年 12 月 20 日)

Напка (Чиё Сато) (сказительница)/ Е. А. Бибикова (перевод на русский)/ Е. Е. Генрихс (перевод на английский)/ МБУК НРЦБ (сост.). 2013. *Мама-крыса и мама-лягушка: Уйльтинская сказка.* (Серия: «В тайге рождённые преданья») Южно-Сахалинск: Издательство «Сахалин-Приамурские ведомости».

Петрова, Т. И. (записала)/ С. Степанов, С. Павлов (сказители)/ Е. А. Бибикова, В. А. Михеев (перевод с уйльтинского)/ Т. Я. Королева (иллюст.). 2014. *Сказки народности Уйльта.* Южно-Сахалинск: Издательство «Сахалин-Приамурские ведомости».

Санги, Н. В., Бибикова, Е. А./ И. В. Красильникова, О. Е. Рожнова (сост.)/ В. В. Осипова (худож.) 2023. *Заюшкина избушка - Жыйк раф – Тукса дукуни.* Южно-Сахалинск: Издательство «Сахалин-Приамурские ведомости».

Чехов, А. П./ Е. А. Бибикова. 2018. *Остров Сахалин (Из путевых записок) XI глава.* Москва: Издательство «Перо».

#### 執筆者紹介

氏名 : 山田祥子 (やまだ・よしこ)

所属 : 室蘭工業大学ひと文化系領域

Email : [yamada@muroran-it.ac.jp](mailto:yamada@muroran-it.ac.jp)